小児期腎疾患の早期発見に関する研究 ―まとめ―

岡　田　敏　夫
富山医科薬科大学小児科

（序言）　小児慢性腎不全にいたる疾患の中には，先天性腎尿路奇形のほか，乳幼児期発症例も多く，これら腎疾患の早期発見，早期治療，管理がきわめて大切である事は云うまでもない。本研究班は，昨年度に引き続き，小児期腎疾患の早期発見に関する研究をテーマとして下記の事項につき検討した。

（検査方法，検査成績）

1. まず3歳児検尿成績については，年度により蛋白尿例，血尿例の頻度にかなりのバラツキがあり，そのため検査法，検査紙の規格の統一化の必要がある。
2. 3歳児検尿の検査項目として，従来の蛋白，潜血，尿糖以外に白血球，亜硝酸さらに尿比重，B_2－microglobulinなどの項目を加える必要性があり，その理由として尿路感染症の発見，ひいては腎尿路奇形の早期発見に必要であることが強調された。
3. 従来より報告されている高Ca 尿症のスクリーニング基準，およびその診断基準について一応の設定が行われた。これらは今後，赤血球形態，血尿の状態の詳細な観察と相俟って，小児期にきわめて多い血尿例の診断，さらに治療に役立つ事が考えられさらに症例を重ねて検討する事が必要と思われる。
4. 昨年度に続き超音波検査法による検査報告が行われ，出生前診断にて3症例（左水腎症，右腎無形成，右腎形成不全－胎児水腫）が発見されたが，本検査法は今後，胎児期新生児期の腎疾患とくに奇形例の早期発見にきわめて有用なる検査法である事，及び今後大いに利用されるものと考えられる。
5. 血清や，尿の検査で把える事の出来ない僅かな異常を，細胞レベルで把握する目的で，赤血球内Na，Kイオン濃度を測定し経時的に，その変動と腎障害の程度，ならびに臨床症状との関連につき検討した。報告では腎障害の程度を評価する際，赤血球内Na，K濃度は微量で測定でき有用な検査法であることが報告され今後さらに検討することとなった。

（症例報告）

昨年度に引きつづき本年度も乳幼児期に発見された各種腎疾患の頻度について調査を行った。

1. 従来，特異な尿細管性蛋白尿として知られている症例が6例報告され，これらの症例は今後乳幼児期における蛋白尿例の診断に有力な手掛りとなるものと思われた。また今後同様症例の全国的調査の必要性がある。
2. 昨年度同様，乳幼児期腎疾患として，腎－尿路奇形症例がきわめて多く発見され，今後の対策を含めて乳児期，幼児期の検尿の必要性とくに乳児期検尿法，検査法の確立が必要と思われた。今回，偶然の機会に発見された生後4月目の腎不全例を中心として，CAPDの問題点，今後の管理上の問題点などが提起された。

（結論）　61年度班会議を通して報告された成績につきその要点を報告した。60年，61年度通して実態が明らかとなりつゝあり，今後，乳幼児期腎疾患の早期発見，さらに早期治療，管理を行うため，さらに検討を加えたいと考えている。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

(結論)　61年度班会議を通して報告された成績につきその要点を報告した。60年,61年度通して実態が明らかとなりつゝあり,今後,乳幼児期腎疾患の早期発見,さらに早期治療,管理を行うため,さらに検討を加えたいと考えている。